

「日興上人の本尊観の一考察」

菅原 関道

日本仏教史上において本尊の造形は鑄塑彫像から画像、そして鎌倉時代に入って字像（文字曼荼羅）へと展開した。その理由として制作費の問題、經典にかわる役割、

師檀関係の表象などが考察されている。なお十三世紀初め頃には「堂を造り塔を立てる、最上の善根也」と説いて勸進した僧と、「もしそれ造像起塔をもつて本願とせば貧窮困乏の類は定んで往生の望を絶たむ。しかも富貴の者は少なく貧賤の者は甚だ多し」と仏説への信力を重視した法然のような僧の二様があった。ちなみに一三〇二年造立の文殊菩薩騎獅像（82.2cm）は制作費二百五十貫文であった（菩薩と獅子の二体分なので目安として一体百貫文余の費用を要した）。

それでは文献から日興上人（一二四六～一三三三）が安置された本尊を確かめよう。①曼荼羅②法華経③御影（上人には仏像造立の形跡がないので消息の「仏」は④⑤の全体かいずれかを指した語であろう）。この三種

類のなかで特筆すべきは①曼荼羅に関してで、上人は日蓮大聖人の曼荼羅の教幅に「懸本門寺可為末代重寶也」と添書されているところから、本門寺建立の際には大聖人の曼荼羅を本尊として安置すべきと考えられていたと推察できる。また上人は書写された自筆曼荼羅に「富士大石寺持佛堂安置本尊也」「白蓮持佛堂安置也」と脇書しており、上人にとって持佛堂に安置すべきは鑄塑彫像や画像ではなく曼荼羅であったことがわかる。

次に上人の本尊観を知る手懸りとして「原殿御返事」「日興上人御遺告」を拝見しよう（両書は上人の真蹟は現存しない）。まず前書には①「南無妙法蓮華経の教主釈尊久遠実成の如来」「上行等の脇士」と②「聖人の文字にあそばして候を御安置候べし」という文が併記され、後書にも①「無脇士一体仏崇本尊、謗法」と②「一間浮提之内未曾有之大曼荼羅」と③「三身即一之有縁之釈尊」の文が併記されている。すなわち上人は①久成の一尊四士と②曼荼羅と③久成仏を一応異なるものではないと考えられていたと思われる。

ではなぜ上人は不造像・曼荼羅為本を買いたのであろうか。主な理由を四つあげてみよう。まず上人の「申状」に顕著であるが、釈尊から付属された妙法を末法衆生へ

下種する上行菩薩こそが大聖人と拝した上人は、仏の因行果徳の妙法は大聖人の信行によって凶顕された曼荼羅を通してこそ名字即成仏をかかなえる法体となると考えられていたと思われること。二つめに熱原法難時に上人が直接大聖人から受けた教えである「未^レ必須^ニモ安^ニ形像舍利並余經典、唯置^ニ法華經一部[」]（昭定二六七一）を守り貫いたこと。三つめに上人は『弟子分本尊目錄』や徳治三年四月八日の書写曼荼羅脇書に熱原法難の顛末を記されたが、上人にとって曼荼羅は広くは大聖人と全門弟の信行を追懐させ、別しては熱原法難時の大聖人と門弟の信行を追懐させる本尊であつたと思われること。四つめに下層武士と農民が多かつた上人の檀越にとつて仏像造立は費用面で困難をとまなうものであつたこと。ちなみに上人の消息に表われる錢の供養は十貫文ほど（最少百文、最多三貫文）、米の供養は一石ほど（最少二升、最多二斗・一駄。一石は当時の一貫文）。しかし上人と門弟にとつて曼荼羅は大聖人と門弟の魂であり本尊としてなにも不備不足はなかつた。貧窮であっても信仰心厚ければ授与された曼荼羅を本尊と崇めることは、法華信仰が底層の民衆に受容されるための不可欠要因の一つであつたのではなからうか。

直接間接に高木豊教授から教えをいただいたことを記して感謝の意を表したい。

妙宗本尊辨考（二）

——大曼荼羅御本尊をめぐる諸問題——

三 原 正 資

本宗の御本尊をめぐることは、①本尊の勧請様式の現状、②本尊の实体に対する認識、③本尊の授与に關して問題がある。

この観点から探ると、優陀那日輝師の本書は、大曼荼羅は「本仏ノ形像」を表現した仏本尊であると主張したものである。「当ニ知ルベシ、本尊ハ釈迦仏ナルコトヲ」（三三八頁）、「十界ノ本尊（大曼荼羅）ハ是レ所頭ノ仏体ナリ」（三三九頁）と述べている。さらに木像釈迦仏と大曼荼羅を比較して「無ニ無別、但タ名体相ヒ異ナル耳」「広略木画ノ異ナル耳」といい、木像の釈迦は「名ニ親しく」「実ニ疎ナリ」とコメントしている。

しかし本尊の勧請様式に關しては「真宗カトリシズム」